

2013 年度すぎなみ大人塾 後期

第3回 講座タイトル「ツナガルシクミ」をじっくり考える

平成25年11月30日(土) 10:00~12:00

会場：セシオン杉並 於

学習支援者：日沼禎子(女子美術大学芸術学部准教授)

坂田太郎(アサヒ・アートスクエア ディレクター)

2週間すぎるのがあっというまでしたね。今日もいい天気で、気持ちよく土曜の朝を迎えました。前回は、慌ただしかったですけど、ものすごく凝縮した時間をすごしていただいたと思います。今日は、ちょっとゆっくりとやりたいと思います。まずは、感想を聞かせて頂きたいです。

学習支援者：坂田

前回はアサヒ・アート・フェスティバルの報告会に皆で見学に行きました。さまざまな地域とアートの事例をご覧になったと思います。アートというテーマで、いきなりいろんな活動を見ていこうとしました。実は、ちょっと心配なところもありました。アートに拒否反応がでたり、わからなかったり。ところが、感想をよんでみて、逆にこちらが学ばせて頂くこともありました。たとえば、「アートが街づくりにつながったり、人がつながれる、そのことに気づきました」という感想がありましたね。大阪のココルームさんが展開されている地域に密着した活動に興味をもたれた方もいたようです。それぞれのプログラムについて、みなさんすごく考えていらっしゃる。



学習支援者：日沼

それから、使われていない小学校が多かったことや、人口が少なくなったことに気づいたなど指摘がありました。ドキュメント型演劇など、実際にアイデアを意欲的に出された方もいらっしゃいましたね。それぞれの感想を聞かせて頂いて、三角インタビューの文字化もしてみました。耳で言葉を聞くということとは違う発見があると思います。では、順番に朗読していきます。

学習支援者：坂田

耳で感想を聞けるのって、ぜいたくな時間ですよ。さて、最初から順番に。

前回11月16日の初回では、訊き手、話し手、聴き手の三人組に分かれて8分間ずつ役割を交代していく「三角インタビュー」を実施しました。

---

三角インタビューは、自己紹介すれば簡単なところで、あえて「訊いて」みる。「訊いている」ことを「聴いている」ことにより、他の人がどんなふうにインタビューにしているのかを知る。次に、家に持ち帰り、「訊いたこと」を文字化することで新たな発見があります。その発表を聞いて「他の人はこうなんだ」とさらに発見していきます。発見の嵐！ツナガル自己紹介でした。インタビューからうかがえた講座への参加動機として、「女子美でのデッサン教室に通っていたので日沼先生から勧められた」「陶芸や折り紙を通して地域活動をしているから」「アートってかっこいい」「現代アートに関心がある」「アートによるまちづくりに興味があるから」「書道を趣味にしているので」「アートを自分の生活に取り入れてみたい」「劇場運営の経験から地域とアートをつなげることができたらよい」「アートという言葉に反応した」「大学時代にアートの刺激を受けた」などなど、アートに関心のある方々のそれぞれの想いが語られました。

---

学習支援者：日沼

ありがとうございました。最後に、感じたことを話してほしいのですが、改めて文章にして、自分が聞くというのは照れくさいけど、お互い発見がありませんか。自分はこんな風にうけとめられているんだ。どのように掘り下げられているんだろう。相手は、どのように自分を受け止めているのかわかたりしません。傍で聞いている人も、その会話に耳を傾けています。言葉の大事さであったり、お互いの関係性を大事にしたりできるのが、三角インタビューの良さだと思います。

学習支援者：坂田

確かに、今回初めて体験してみて、2人と3人では違うなと思いました。2人だと、自分が話しているのを他人に見られていませんが、3人だと自分のインタビューを見られています。見る方も、他の人はどんなインタビューをするんだろうと、じっくり観察し始めます。記事として文字でまとめると、聞いた話をもう一度考えますし、そこで新しい発見がありますね。

学習支援者：日沼

はじめて他人とつながる時って、きっかけがないと聞けない、話せません。ところが、インタビュアーという役割となると、積極的に聞けるようですね。初日からチャレンジしましたが、良い文章ができたと思います。

学習支援者：坂田

残りの1時間は、日沼さんにレクチャーをしていただきます。国際芸術センター青森というアーティスト・イン・レジデンスの施設で日沼さんが企画された『ツナガルシクミ』という展覧会についてです。今回の講座のテーマはこの展覧会からとってきたものです。専門用語も混じるかと思いますが、アートの現場ではこんな仕事があるんだな、こんなことをやっているんだなというのを知っていただきつつ、今回のテーマ「ツナガルシクミ」について、皆さんと考えたいと思います。



学習支援者：日沼

私は展覧会を企画する仕事をしていて、アーティストからアイデアをひきだす側にいますが、今日は坂田さんから私が引き出していただくような感覚です。アーティストたちに新たな作品を作ってもらうコーディネーターが主ですが、特に私は制作のプロセスを大切にしています。最終的に展覧会として発表するのですが、アーティストが何に出会って、何を作るのか。今回とりあげる企画『ツナガルシクミ』は、そのプロセスをテーマにした仕事です。こちらが、この展覧会で作品を作った3人、藤浩志さん、小山田徹さん、高嶺格さんです。この3人には共通項があって、鹿児島甲南高校美術部出身発、京都市立芸術大学部バレーボール部、演劇部でした。

3人の出身校である鹿児島甲南高校では、近所に美術の予備校がないので、夏休みに卒業生である先輩たちが高校にきて、デッサンなどの受験対策を指導するのが恒例になっていました。そのときに会った後輩を京都芸大に誘って、バレー部にいれて、そのあと藤さんが演劇をたちあげ、劇団は2人に引き継がれて、「ダムタイプ」という国際的に活動する団体となり、小山田さんは舞台監督担当、高嶺さんはパフォーマーとして活動しました。そうした3人がお互いのつながりから、どんなことがおきるだろうと思ったことが企画のきっかけです。彼らは、今、それぞれ独立し、世界中で活躍しています。あちこち飛び回っているので家族と過ごす時間がありません。せっかくだから、家族みんなで夏休みのひととき、家族、友人のつながりの中から生まれる展覧会を考えました。こういう風にやろうと初めから決まっていることは少なく、アーティスト

トと話していくうちに作品の方向性などのアイデアがでてきます。私にとって、アートが美術館だけに収まっているのは、なにかモゾモゾします。青森に来て、3人3様に、新たな表現が生まれました。

高嶺さんは、家族の家を作りたいと動き出しました。丸ごと木を抜いたツリーハウスです。根っこをみせたいので、木を抜くのが本当に大変でした。2週間掘り続けて、手で土を丁寧に拭いていました。地元の建設業の方に手伝って頂き、ツリーハウスというよりも、建設でしたね。途中子供たちも集まって、遊び場となっています。現代では、家は買い物になっています。でも、本来、自分の家は自分で創ったってよいはず、と高嶺さんは考えています。そうした「人間の自由を象徴する存在」として、フリーハウスとタイトルを付けました。展示が終わったあとは、地元の NPO に引き取ってもらい、子供たちの遊び場となっています。



acac blog

ツナガルシクミ制作レポート：高嶺格

<http://acacaomori.exblog.jp/14938058> より

藤浩志さんは、廃材をつかって新しい価値に転換する作品を制作しています。そ



して、そのことを社会に考えさせる作品です。ここでは青森の「ねぶた」を作品に使いました。青森のねぶたは、お祭りが終わった後は、廃棄します。このことは地元住民もほとんど意識をしていない事実だと思います。そこで、ねぶた小屋にお邪魔して、お祭りが終わった後のねぶたを頂けないかと交渉にかけました。そうしたら、ねぶた関係の方が、運賃だけで譲っていただけることになったのです。写真を見ていただきたいのですが、ねぶたは、廃棄するまえに目玉の部分を取りとり、魂を取るんですね。私自身、このことを初めて知りました。



藤浩志

Report 藤浩志企画制作室 <http://geco.exblog.jp/11119495> より

ねぶたは、木材、針金、和紙に分類します。1台分でも相当な量を廃棄します。分類したものをギャラリーの中心に置おいて、来場者に自由に工作してもらう企画にしました。捨てられるものを新しく自分で発想して作り変える。こういうことを提示したいと思ったのです。なかでも、子供は小さな部品を使って、玩具を作ってみたり、大人も夢中になってベンチを作ったりしていたことが印象的でした。

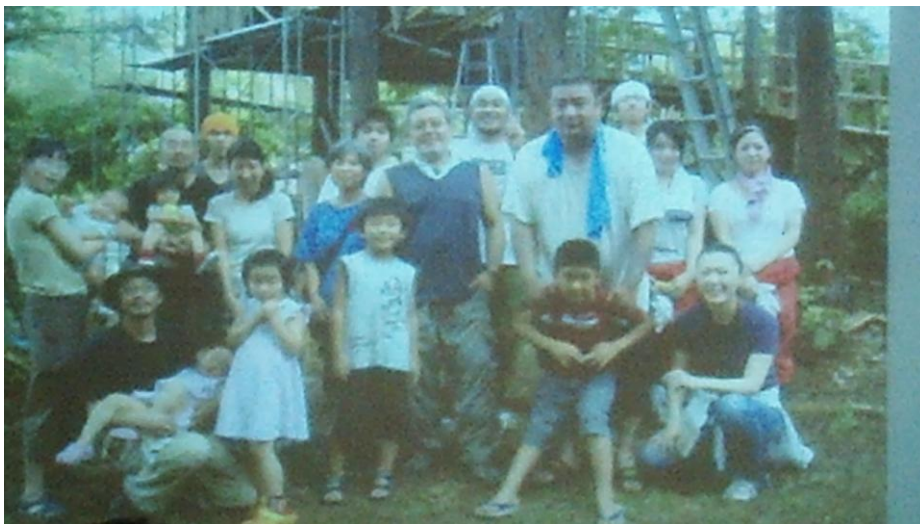
小山田徹さんは、移動可能な小屋を博物館に見立てたものを設置しました。偶然に森で拾ったものや、洞窟で探検して発見したものを展示しています《飛ぶ教室》というタイトルです。また、遺跡発掘の記録方法である「実測図」に書き起こしたものを並べたり、作業場兼、教室のような実験的な空間でした。ここに滞在しているので、展示が毎日アップデートされていくのです。



ArtScape 2010年10月01日号

[http://artscape.jp/report/curator/1222080\\_1995.html](http://artscape.jp/report/curator/1222080_1995.html) より

こちらは、記念撮影です。それぞれの子供とフィリピンからの研修者やボランティア・スタッフもいます。



このアートセンターには普通の美術館と異なって、宿泊スペースがあります。子供たちも集まりますし、一緒に食事もとっていました。鹿児島と青森の味を比較するワークショップも開催しました。鹿児島では、「ごじる」と呼ぶ郷土料理、おふくろの味があるのですが、同じような料理で、青森では「けの汁」というものがあります。カフェを経営されている小山田の奥さまの発案で、ここで「料理教室をやりたい」と、おふくろの味を味わう会を企画しました。地元のお母さんたちも集まって大試食会です。子供たちと一緒に白玉だんごも作りました。ふだん、美術館に来ないお客さんも料理教室となると来てくださいました。また、小山田さんの奥さまは手芸教室もやっていらっしゃるの、青森

の伝統工芸である「こぎん刺し」のワークショップも行いました。実は、私の義理の母が「こぎん刺し」をやっているのです、滞在中に習いに来てくださいました。そこで、若い世代にも喜ばれるような胡桃ボタンを作りました。展覧会としては、常に動いている展覧会でした。そして、アートではなく、料理や手芸教室など、さまざまな人たちに関心をもってもらえる入り口をつくったのです。アーティストには家族で滞在していただきましたので、私たちが普段思っているアーティストのイメージ姿とは異なり、私たちと何らかわりのない、家族をもった人間であると同じ生活者である姿があると気づいてもらいたかったです。アーティストたちも、三人三様に作品を作っていましたが、何かしら共通点が見えてくる。共通の「ルーツ」を持つということで見えてくる「つながり」が見えてきました。高嶺さんの作品に、木の根っこ（ルーツ）が使われたのは、偶然でもあり、必然でもあったと思います。

小山田さんは人々と、さまざまな価値を交換できる場を作る。藤さんは価値がなくなったものを編集し、新しい価値に転換させていく。高嶺さんは、今の社会システムに対して、家族という小さな社会の姿を提示することで、「社会」とは何かというメッセージをなげかける。それぞれ表現方法は違いますが、「社会」へのアプローチに対する共通点があります。

学習支援者：坂田

実は僕自身も企画は知っていましたが、実際には見ていません。今日初めて、細かな話も聞けてとても興味深かったです。幾つか質問をさせてください。さきほど、家族のつながりなど、「ツナガリ」という言葉ができましたね。3人ともに提示するつながりが、大きなシステムというよりも、身近なつながりに注目しているように感じました。ワークショップも目の前の人と何が共有できるのか、そのあたりを大事にしている印象を受けました。3人それぞれのツナガリの捉え方を教えてください。

学習支援者：日沼

そうですね。同じ時間を長く過ごしてきた同士だからこそ、時に反発もし合った時期もあったそうです。そういうこともありながらも、表現とはアーティストだけのものではなく、私たちすべての人間に存在していることを、確認し合っているのだと思います。

そして、人間同士の関係性の中からは、新しい「もの」や「価値」は生まれ



ないのだなど。対人、対環境などが社会を形成していくということを、この3人のアーティストたちは常に考えているように見えます。

学習支援者：坂田

普段は見過ごしてしまいそうな、目の前にある関係や繋がりを丁寧に見ていく。「ねぶた祭」が終わったあとに、あれが全てゴミになるんだなど、僕自身も当たり前のことなのですが見えていませんでした。そこに繋がりを作っていく。自分とねぶた。自分とゴミ。そういう視点というのは、アーティストならではの思いました。

学習支援者：日沼

しかも、それを提示しなおして、青森という地域に還元したことに、ハッとしました。「ゴミになっちゃう、ひどい」で終わるのではなく、新しい価値に転換して渡す、視点を変えるのがアーティストの仕事だと思います。小山田さんは、石好きなのですよ。とにかく毎日、石を拾ってくるのです。それをずっと眺めている。そこに、原初的な美しさを感じ、遠い過去のものを、過去のものだけにせず、現在にとつなげているのはスゴイと思います。高嶺さんは、世の中のタブーをどう超えるかを常に発想しています。現代社会に対し大声で反発し、訴えていくのではなく、ユーモアを忘れないことも高嶺さんの素晴らしさだと思います。木を抜くのは暴力的に見えるかもしれませんが、芸術作品としてのインパクトがあります。暴力的にも、タブーとされているように見える「生きているものを抜く」という行為。けれども、私たちは木を切って家を建てていますよね。とても残酷という感想を持つ人もいれば、子供たちはツリーハウスにのぼってワーワーと楽しんでます。「家」というものに対する人々の考えをシフトさせていく。社会のタブーを乗り越えるという難しいテーマでありながらも、ユーモアがある。そうしたことも含めて、3人で共有してきたのではないかと思っています。

学習支援者：坂田

今回のテーマは『ツナガルシクミ』ですが、これからはみなさんと一緒に自分の中にツナガルシクミを探っていきます。アートをもう少しプライベートなところ、身近なところから考えて行けたらなと思います。

学習支援者：日沼

企画のきっかけは単なる思いつきにみえるかもしれませんが、熟考した展覧会でした。私たちは常に社会の仕組み、システムの中に、生きているのですが、それを見直す時代に来ているのではと思います。国際芸術センターは青森市の行政が関わっています。行政がアート事業を行うことは、大きな矛盾をはらむことでもあります。なぜなら、芸術作品は、そもそも、アーティストという個人の目線や経験から生まれるものだからです。それを、パブリックに開いていく時に、どのようなプロセスが必要になるのでしょうか。特に、現代美術のような歴史上の価値の定まっていない評価されるか、されないかわからないものを行政が扱っていくことはどういうことなのか考えてきました。

以前の企画で、2ヶ月のお子さんを持つアーティストの滞在制作の受入を検討したことがありました。しかし、他のアーティストも同時に滞在しているので、子供連れは単身の人には迷惑がかかるだろうと断ったのです。行政事業としても単身で来ることが契約条件でした。しかし、私個人は、とても素晴らしいアーティストただだけに、自分自身の判断はこれでよかったのか本当に落ち込みました。彼の時間と気持ちを考えてあげられなかった悔しさをずっと持っていました。その数年後、やはりイタリアから2歳の子どもを持つアーティストの滞在を検討しました。今度はご主人が同行して世話してくれるので大丈夫ということになり、受入を決めました。しかし、単身で滞在している他のアーティストとのトラブルが生まれました。ウルサイと迷惑がっていました。集中しているので、子供が騒いでいると気になるのです。当然のことだとは理解しました。けれども、私たちは誰もこうやって、親や地域の人たちから育てられ、成長していくのではないか。それが、コミュニティであり、パブリックなのではないか。家族を持った人が、排除されるって変だな。生活を受け入れることって、どうして出来ないんだろうとモヤモヤしていました。それでは、全員家族連れの滞在だったら可能なのではないかと、気心の知れている3人のお父さんアーティストを招いたのです。アーティストの生活を受け入れことで、家族という最も小さな単位から始まる社会のあり方、つながりというものを、このアートセンターから地域に伝わってくれればと。そういうパブリックの考え方もあっていいはず。そういう思いで取り組んでみました。

地域、お互いのつながりとは何かを考えていくと、まずベースになるのは個人であるひとりひとりです。私たちは誰でも、個人が生きてきたバックグラウン

ド、一緒にすごしてきた家族との経験を基盤にしながら、地域に入っていく。その時に、どう関わりをもっていくか、バックグラウンドをどう表現していくか。これが、この講座にとってヒントになるかもしれないなと思います。

学習支援者：坂田

お話を聞いていただいて、ツナガルシクミというテーマで何かを作っていたり、青森と鹿児島味噌をつなげてみる企画、アートの考え方、そもそも、つながりの出発点とは等、いろんなヒントがつまっていましたね。時間があるので、4人ぐらいで話し合ってみましょう。ちょっと、感じたことをシェアしてみてください。

学習支援者：坂田

盛り上がっているところですが、ひとまず終えていただき、ちょっと聞いてください。次回は、ツナガルシクミを考えるために、役立ちそうだなと思う本を一冊持ってきてください。参考になる本があると、いいですね。イメージを膨らませたり、方向性を示したり、誰かに伝えたいなと思う本です。ツナガルを、他の人は、こう考えているんだとわかるきっかけになります。アートでなくても、料理本やマンガでも構いません。本自体が、つながりを感じるものでもいいかもしれません。それぞれが持ち寄れば「ツナガルシクミ」に関係した小さな図書館が生まれると思います。セッションさんで管理して、毎回ならべていきます。本を選んだら、名前、筆者名、自分のお名前、一言を御配りした葉に書いて来てください。印象的な言葉や、おすすめのポイントなど短くてかまいません。本に挟んでもってきてください。

学習支援者：日沼

来週は、手を動かしながらアート作品のようなものを作ります。それぞれの方に素材を持ってきていただきます。その当日の朝に捨てようと思ったものを持ってきてください。前の夜でもけっこうです。ティッシュの箱でもビールの瓶でも、捨てようと思ったものを持ってきてください。

学習支援者：坂田

次回も楽しいことが待っているような予感がします。それでは、みなさんありがとうございました。